

子どもは未来をつかみたい

2017年度年次報告 2018年度年次計画

(認定) 特定非営利活動法人 **ラオスの子ども**



ແມວນີ້ ພວກເຮົາຈຳເປັນ ຈຶ່ງຫ້າງ
ບ້າງແຮວໃສ່ ຕໍ່ໄປທ່ານຍໍາໄດ້ຢຸບ
ຢ່າອິກ
ເຕີ!"



目次

2017年度 第16期 事業報告

この1年	p2
ラオスでのプロジェクト	
I. 本に出会い、親しむ（読書推進活動）	p3
II. 本をつくる（出版プロジェクト）	p5
III. 集い、表現し、学び合う（子どもセンター）	p5
日本での活動	p6
組織の運営	p7
2017年度 第16期 会計報告	p8
2018年度 第17期 事業計画・予算	p9



2017年度活動地域

■	学校図書室の地域への展開事業	6ヶ所
■	学校図書室(HakArn)整備事業	2校
■	高校生のための奨学金事業	2都県

「ラオスのこども」とは？

はじまり

1982年、ベトナム戦争後の長引く混乱と停滞の中、東京在住のラオス人と日本の友人などが、「ラオスの子どもたちも日本のおともだちと同じように絵本を楽しんでほしい」と幼稚園のバザーなどで集めた絵本をラオスに送りました。これが「ラオスのこども」の活動の始まりです。

足どり・活動の柱

本も書店も図書館もほとんどなく、読書をする人も少ないラオスでは、多くの先生にとって、絵本は初めて出会うものでした。1990年代に入り、当会はラオス語の絵本出版を開始。あわせて、子どもと本とをつなぐ先生のトレーニングなど読書の推進普及に力を注ぎました。また、学校では音楽・図工・体育や部活動が行われていないことから、そうした活動ができる児童館のような「子どもセンター」を各地で開設支援しました。

めざすもの 子どもは未来をつかみたい

「ラオスのこども」の組織の理念は、校正で平和な社会づくりに貢献することを目的として、子どもたちが自

らの力を伸ばし、人生を主体的に選択できるよう、日本とラオスの人々が協働しながら、読書に親しむ環境をつくることです。

これまでの取り組み、成果

当会は読書推進活動の拠点として、これまでの学校に加え、近年は地域にも焦点をあてています。スタッフが現場を訪問し、状況に応じた指導を繰り返し丁寧におこなうことで、図書活動が活発化しています。ラオスの小中高校10,577校（小学校8,849校、中学高校1,728校）のうち、312ヵ所で図書室（うち16ヵ所は地域文庫）を開設し、2,732校に図書セットを配付、2,318校で図書補充活動をおこないました。

出版では、民話、創作絵本、紙芝居や海外作品の翻訳など、多彩な出版をしました。今年度末までに、ラオス語図書 220種類 901,255冊（図書185/紙芝居19/教科書類6/ニュースレター10）を現地出版しました。

学校外において子ども同士で様々な活動ができる「子どもセンター」は、これまでに全国14ヶ所の運営を支援してきました。

2017年度 第16期 事業報告 (2017年7月1日～2018年6月30日)

この1年

ラオスの状況

経済の活発化にともない、とりわけヴィエンチャンでは「教育熱」がますます高まっています。至る所で学校が新設され、月謝が200ドル近い私立学校でも、生活を切り詰めても「良い学校」に子どもを入れることに親の躊躇はありません。一方、公立小学校は子どもたちが減り、閉鎖に追い込まれる学校もあるといいます。その「良い学校」とは、英語、中国語、コンピューターを教えるなど実利性が高く、個の「豊かな生活」に直結する技術を一番とする学校です。親が子どもの将来を想い、実利を大切にすることは分かりますが、以前のように、社会に「みんな」で良くなろうという雰囲気が減っていることは気になります。というのも、読書推進などの活動が、ラオスの人々によって担われるようになることを念頭におき、私たちは活動方針を決めてきましたが、この担い手が、個の豊かさを追求する社会の流れの中で、見つけにくくなっています。ヴィエンチャン近郊の中等学校で、図書館建設の要請を校長から1時間ほど受けた後、教室を出ると目の前に「library」と表示の建物。結果として校長が「図書館」がどの様なものか、理解していないことを思い知らされました。(主に教科書倉庫として使われている)建物としての図書館はあっても、機能としての図書館は認識されていません。昨今のラオスでは「教育」という言葉も同じではないかと、案じられます。

社会環境が変化し続ける中、ごく普通の人が、読書のなかで自分の世界を広げ、豊かな時間を持つことができるようになってほしいと、私たちは活動を今年も展開しました。

ラオス教育データ

小学校の純就学率^{*1}の推移(全国平均)

年度	純就学率(%)		
	計	女子	男子
1995-1996	65	72	
2000-2001	80		
2005-2006	84		
2010-2011	94.1	93.3	94.9
2016-2017	98.7	98.6	98.8

小学校入学児童が卒業する割合 2016-2017

全国平均	79.2%
最低県:セコン県	65.6%
最高県:ヴィエンチャン都	92.6%

小学校の就学率は年々上がっており、ラオスの教育環境が徐々に改善されていることがうかがえます。一方で、小学校を卒業できない子ども達も4人に1人います。県別の違いをみてもわかるように、都市部と地方の差が大きくひらいています。また、中等学校への進学率も徐々に上がってきていますが、まだ十分な環境とは言えません。

活動の課題、重点的取り組み

今年も、これまで会が継続してきた様々な活動の幹となる「読書推進活動」「出版プロジェクト」「子どもセンタープロジェクト」を中心に活動を展開しました。4年間にわたりJICAと共同して取り組んできた学校図書室の整備に加え、地域に文庫を設け、村教育開発委員会はじめ、村の人々が中心になって支えていく仕組みをつくる「学校図書室の地域へ展開事業」が最終年度となり、プロジェクトの成果と今後の課題は何であるかを検証する活動がおこなわれました。加えて、あらたに開始を予定している中等学校における図書館開設プロジェクトの立案においても、ラオス事務所と事業における計画立案、実施、評価など、PDCAサイクル(Plan計画→ Do実行→ Check評価→ Act改善)について、共同・共有を強めることができました。

資金調達においては、定期的な募金活動を継続することで、成果をもたらすことができました。今年度は計978件のご支援をいただきました。多くの皆さまに支えていただけたこと、心から感謝にたえません。

課題であった、ラオス政府との活動覚書MoUの契約締結について準備を進め、目途がつくところまでこぎ着けましたが完了せず、活動に制約ができるなど組織運営に問題を残しました。また、慢性的な人手不足により、計画にあっても、実施できなかつた計画も残り、来年度での改善が必要です。



中等学校^{*2}の進学率と純就学率 2016-2017

小学校卒業者の中等学校進学率	89.7%
中等学校前期課程(1-4年)の純就学率	82.9%
中等学校後期課程(5-7年)の純就学率	51.4%
中等学校へ入学した生徒が卒業する割合	60.0%

(出典) 教育スポーツ省統計情報センター
(2010年度以降は、Annual School Census)

*1 純就学率: 教育を受けるべき年齢に実際に教育を受けている人の割合

*2 中等学校は7年間あり、日本の中学、高校レベルにあたる

| 本に出会い、親しむ（読書推進活動）

ラオスではこれまで、教科書が1人1冊揃わない地域が多く、学校で読み書きを習っても、学校を離れると日常で文字にふれる機会がなく、やがて読み書きができなくなってしまうという状況が続いていました。新しい知識や技術を学びたいと思っても、読み書きができないとチャンスが限られてしまします。そこで当会では、子ども達に本を届け、読書の楽しみを伝える活動をおこなってきました。ラオス国立図書館、教育スポーツ省、県・郡教育局と連携し、1992年から約3,000校に図書セットを配付し、312校に図書室を開設し、読書習慣の普及を図ってきました。

そして今、私達が取り組んでいるのは、子ども達の「もっと読みたい」「もっと学びたい」を支える活動が、ラオスの人々自らにより担われ、広さと深さを持つようになることです。そのため当会は、学校教員、教育局、保護者、地域住民など子どもを取り巻く人々が本に関心をもてるよう、多方面から改善のためのアプローチをしています。

地域に裾野を広げる学校図書室

地域住民を図書活動の担い手として巻き込み、学校の図書活動の裾野を地域に広げる事業で、ルアンナムター県(ナムター郡・ナーレー郡)ヴィエンチャン県(サナカム郡・ムン郡・ファン郡・メート郡)の2県6郡において、16ヶ所を対象に、4年間にわたり事業を実施してきました。

今期は、事業の終了にあたり評価をおこないました。事業地16ヵ所を回り、開設した各学校図書室と地域文庫の運営がどんな状態か、運営の記録を確認し、質問紙を用いて教員や村教育開発委員会の運営担当者や校長、村長、利用者である子ども達と村人達、総勢427人にインタビューを実施しました。



聞き取りをまとめた結果、学校図書室も地域文庫も、定期的に開かれ、それぞれが目標としていた開放日数を大きく上回っていることが確認出来ました。また、全ての対象校で、週1回以上図書を活用した授業又は読書推進の活動を実施していました。うち50%（8校）は、週2回以上の実施と、目標を大きく上回りました。

地域文庫の開設は、村の大人たちにも読書の機会を提供し、活発なところでは、利用人数も予想を上回っている結果でした。しかし、地域文庫2ヵ所については、設置した場所が貸主の都合で使えなくなり、活動が停滞しているところが見られました。総合的には、学校図書室はどこも活発に運営がされていることが確認でき、学校図書室と地域文庫の両方を利用できるようになれば、子ども達の利用の機会は増えるという狙いは達成することができました。



子ども達に「図書室が出来てどのような変化があつたか？」と質問したところ、「本を読むのが好きになった」「ラオス語の成績があがった」「学校に来るのが好きになった」「もっと本を読みたくなった」「宿題がやりやすくなった」「積極的になった」という回答が複数あげられました。

地域文庫を利用する中学生からは「地域文庫ができるおかげで、学校が休みでも本を読んだり借りたりすることができるようになって、とてもたすかります。」「私の中学には図書室がないので、この地域文庫が唯一、本を読める場所です。地域文庫がないと困るので、私も運営のお手伝いをするようになりました。」といった声もありました。



評価にあたっては、JICAのガイドラインに従い、客観的な評価をおこなうことが出来ました。また、第2フェーズ実施のための検討をおこなった結果、しばらくは現地での運営状況をフォローアップしつつ、時間をかけて事業を形成し、申請は2019年以降とすることとなりました。（学校図書室の地域への展開事業/JICA国際協力機構草の根技術協力事業）

2ヶ所の中等学校に図書室をオープン

過去3年間に開設した図書室56ヶ所に対し、補充図書セットの送付をおこないました。地域文庫に対しての図書補充は、2017夏募金のご支援により実施することができました。しかし、学校を訪問するフォローアップ活動は、他事業の業務に追われ現地スタッフに余力がなく、十分な活動をすることができませんでした。また、新規開設は、計画より少ない、ヴィエンチャン都とカムワン県の中等学校2ヶ所での開設となりました。

また、当会の図書室整備事業の評価が広まり、ラオスで活動するNGOや私立学校から、図書室開設や、図書室用の図書と運営備品のセットを提供といった依頼が増加してきています。

《ご支援:福岡那の香ライオンズクラブ、千葉港ロータリークラブ、(公財)ベルマーク教育助成財団、夏募金2016/2017》



中等学校での図書館建設事業の準備

図書館建設事業の開始準備のため、ヴィエンチャン都2ヶ所、ヴィエンチャン県5ヶ所の中等学校において、専門家による建設妥当性の現地調査活動をおこない環境調査の他、学校当局、地域教育局との事前調整をおこないました。その結果、ヴィエンチャン県3ヶ所を選定し、3年間をかけて事業を実施する計画をまとめました。今期は申請準備をおこない、事業は次年度開始を予定しています。

事務所併設子ども図書館の活動状況

事務所併設子ども図書館は月曜から土曜まで開館し、近隣の小中学校の子ども達を中心に、1日平均15人が来館しました。図書は一人平均2.4冊を借りていますが、図書を借りるのは来館数の2%に留まっています。



スタッフが交代でおこなうミニプログラム(折り紙、塗り絵、切り絵、図画工作、手作りゲームなど)は、継続して実施しています。しかし、スタッフの地方出張が重なる時期は、人手も時間も余裕がなく、臨時閉館とすることも増え、満足度を高めるような企画を十分には作れていません。

現地在住の日本人ボランティアの方が、一時期間、昼休みに来館する中学生向けに創作アクティビティを実施し、大変人気でした。

8月には、大学生ボランティア7名が恒例のリコーダー＆創作ダンス教室を開催しました。毎年継続しているため、子ども達には恒例行事として定着しており、楽しみに待っていた子ども達も多かったとのこと。子どもたちに自己表現の楽しさ、協力してひとつのことをやり遂げる大切さを知ってもらうためのプログラムを工夫し、最後には、子どもセンターの子ども達と合同で、保護者を招いた発表会をおこないました。



また、2月には、四天王寺大学の学生18名が、小学校3校、子どもセンターにて、ラオスの子ども達と様々な活動をおこないました。小学校では、ラオスではあまり行われていない実験・体験をとりいれた理科授業をおこない、糸電話を使った音の伝達を学ぶ授業や、水のろ過装置を作る実験などをおこないました。また、子どもセンターでは、ミニ運動会を開催し、40名以上の子ども達が参加しました。



更に、事務所では、ラオスの大学生たちとの交流会を実施し、同世代同士で、教育問題から将来のことまで、様々なことを語り合う機会を作りました。



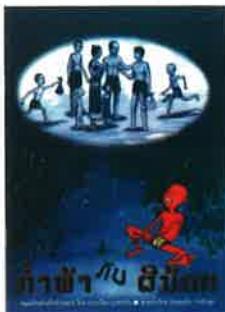
II 本をつくる（出版プロジェクト）

ラオスでは、首都でも書店や図書館がほとんど見当たらず、本を目にする機会がありません。子どもたちが本に親しむには、ラオス語で書かれたものが不可欠なことから、当会では1990年から絵本を中心にラオスでの出版を手がけてきました。作家がほとんどいない中、日本人やタイ人の専門家による絵本作りセミナーを開いたり、コンクールを通して若手作家を発掘・育成し、これまでに220点901、255部の本や紙芝居を出版しています。

近年は消費社会化が進み、ファッショナブルや流行情報を発信する雑誌も登場し、出版を取り巻く状況は急速に変化しつつあります。首都では図書を販売する場所が少しずつ増えていますが、一方で、子ども向けの書籍はバラエティが少なく、質の向上が課題です。私たちは「子どもの心に灯をともす」ような、質の高い本作りを目指しています。

人気の図書を再版、7,500冊を出版

今期は、図書2作品、紙芝居1作品、計7,500部を出版しました。全て再版作品です。



『カンパーとピーノイ』第5版 (孤児と小さいお化け)



『カンパーとナンガ』第4版 (孤児と象牙娘)

作)ドゥアンドゥアン ブンヤボン 絵)ヴォンサヴァン
各3,000部

この2作は連続したストーリーとなっており、主人公のカンパーがお化けや象牙娘に助けられながら幸せになるという話です。ラオスで最も有名な民話の一つで、常に図書室の貸出上位に入る人気作品です。学校や図書の委託販売先からも多くリクエストが寄せられるため、再版を決定しました。当会では、1990年に出版して以降何度も改訂をおこないながら、再版をしてきてています。

《ご支援:冬募金2016 自己資金》



紙芝居『誰の穴かな』第2版
作・絵) コンサワン シーチ
ヤントンティプ 1,500部

2003年に、当会がラオスで初めて開催した「紙芝居コンクール」において、大人の部で入賞した作品の再版です。カニとヘビが喧嘩をしているところを通りかかったカメのおじさんが、知恵を使ったやりとりで、仲直りをさせるという、ラオスらしいストーリーのオリジナル作品です。

《ご支援:学習院女子大学 絵本出版指定募金》

折り紙ワークショップの実施

大好評の折り紙ワークショップの第3弾をカムワン県にて、2月と3月の2回にわたり合計40名の小学校の先生を対象に開催しました。講師を務める当会スタッフは、事務所併設の図書館で日々子ども達を相手に活動を実施している為、子どもの興味や間違え易いポイントなどを熟知しており、この現場経験に基づき教えているのでわかりやすいと評判です。また、絵本の読み聞かせと運動させるプログラムなど、授業で活用できるテクニックを伝えると、参加者からも新たなアイデアが出されるなど、より広がりのある内容となりました。

《ご支援:キヤノン株式会社》

III 集い、表現し、学び合う（子どもセンター）

ラオスの学校は、座学による暗記が中心で、音楽、図工、体育はカリキュラムはあっても、指導ができる先生がいない、道具や材料がないといった理由で、子どもたちの情操面を伸ばすような活動をする機会がないという状況がありました。そんな中、1994年に、当会などの協力によって、自己表現活動ができるラオス初の子ども施設として、情報文化省による「子ども文化センター」が開設されました。その後、活動は定着し、同様の施設が全都県に設置され広がりました。しかし近年は、社会の変化とともに、子ども達のニーズが多様化することで、来館者が減少し、活動が停滞している館が増えてきています。当会では、自立を促す方向から、各センターの個別支援を減らしてきましたが、センターの活動再建のために、再度サポートをしていくことにしました。

ヴィエンチャン都またはヴィエンチャン県のセンターで、1~2講座の運営費をサポートし、運営立て直しのモデルケースとして試行する計画でしたが、センター側との話し合いが進みませんでした。一方で、サイアブリ県パクライ郡の子どもセンターから活動支援の要請があり、具体的な計画書の提出があったことから、今年度の支援は同子どもセンターへおこないました。

1月28日～2月4日の学校が試験休みになる時期

に、子ども達がセンターに来て、本や様々な創作活動に触れる機会を、提供しました。



IV もっと学ぶことが出来るように（その他受託事業）

高校生のための奨学金事業

タイのThe Siam Cement Public Co., Ltd.(SCG)より、6年目の受託。ヴィエンチャン都全域及びカムアン県4郡の中等学校5年生～7年生が対象で、経済的に厳しい家庭状況で、学習意欲の高い生徒に、1年間の奨学金を支給するプロジェクトです。教育局と協力し、ヴィエンチャン都全域及びカムワン県4郡にある公立中等学校に願書を配布し、書類選考後、審査員が直接学校や家を訪問し面接しました。その結果、ヴィエンチャン都160人、カムワン県140名、計300名の奨学生を決定し、1年間一人約2万円の奨学金を提供しました。

その他の受託事業

スイスファンドのLao Cultural Challenge Fundの支援により、ブックフェスティバルを開催しました。本と読書に関する子ども達向けのイベントで、3月から5月に

かけて、ヴィエンチャン都、ヴィエンチャン県(2ヵ所)、カムワン県にて、計4回実施しました。各地域2日間開催し、のべ134校から7112人が参加しました。



小田原ユネスコ協会のご支援による、日本とラオスの小学生の絵日記交換に協力しました。10年以上実施した本プログラムは今年度で終了となりました。

日本での活動

日本では、活動を広く知らせ、ご支援、参加の呼びかけなどをおこなっています。また、どなたにも参加いただける、ラオスの文化や食を紹介するイベントや、学校に出向いて国際理解教育の参加型プログラムも実施しています。いずれのイベントもインターンやボランティアの仲間とともに作り上げています。

中学校・高等学校で授業

2ヵ所の中学校と1か所の大学へ講師派遣をおこない、プログラムを実施しました。その他、大学や企業と、国際理解を深めるイベントを通して連携を強めることができました。また、文化祭での取り組みや、募金や書き損じハガキの収集で、図書室開設支援をいただいた3か所(沖縄、福岡、愛知)の高校を訪問し、直接お礼を申し上げることができました。

参加型プログラム

●ラオス語絵本プロジェクト

今年度は、43件(31人・団体)のみなさまの参加により、合計1,527冊の絵本が作成されました。昨年度に比べ、件数が2倍、冊数は3倍となりました。1年間で複数回の申込をする人や団体での取り組みが増えていることが、大幅な増加に結びつきました。企業と協力した「ラオス語絵本づくり」のイベントも2回開催できました。

また、担当インターンを配置し、翻訳シートの改訂データ化を進め、全体の62%が完了しました。

●書き損じハガキの収集

書き損じや使い残しの未使用ハガキを集め、プロジェクト運営資金に活用しています。書き損じハガキ3枚が、ラオスの絵本1冊分に相当します。この1年間で105件、書き損じハガキ4,484枚・未使用ハガキ2,277枚、未

使用切手114,200円、計405,137円相当のご支援を頂き、昨年より125%増加しました。

プレスリリースを積極的におこなった結果、記事が京都新聞、東京新聞に掲載されました。また、配付物やフェイスブックなどで積極的に広報した結果、新規の協力者が増える成果に繋がりました。

活動ミーティング

会員、ボランティアが集まる活動ミーティングは、スタッフの出張報告や学生ボランティアの活動報告、イベント企画や振り返りなど、計4回開催し、延べ58名が参加しました。

イベント開催

ラオスの様々な民族の織物、刺繡を使った小物や洋服の展示販売をおこなう「織物展」を、各地のギャラリーなどの協力を得て、今期は計6回開催しました。特に、京都での織物展では、京都新聞、毎日新聞に掲載されたおかげで、多くの来場者を得ることができました。

毎年4月に、東京・大田区内の施設で開催しているラオスの正月を祝うイベント「ピーマイパーティ」は、活動紹介とともに、ラオス料理を味わい、ラオスの文化を体験していただき、好評を得ています。朝日新聞に掲載されたこともあり、たくさんの方に参加していただきました。

組織の運営

1. 全体運営

■理事会

理事7名、監事2名により運営が担われ、理事会は4回開催しました。参加はのべ28名で、財政状況、資金調達、プロジェクト運営についての報告、討議などがおこなわれました。

■総会

9月16日に、活動会員33名（書面表決、委任状を含む）が参加し、2017年度通常総会を開催しました。第15期事業報告案及び会計報告案が承認され、第16期の事業計画・予算が報告されました。

■運営

課題であった年間スケジュール計画の精度は徐々に上がってきていますが、両事務所間の共有やアップデートなど、進捗管理はまだ充分とはいえません。

会員は、活動会員は13%ほど減少しましたが、賛助会員は10%ほど増加しており、賛助会員の継続率は向上しています。また、各種募金による寄付の働きかけの改善により、一般寄付金・指定募金共に金額が増加し、より安定した財務体質への改善が進みました。

■資金調達

今期も夏募金冬募金に取り組み、ニュースレターの特集記事を連動して掲載するなど、資金調達の手法として定着してきました。達成率は、夏募金は63%、冬募金は66%とどちらも目標額には達しなかったものの、支援を再開してくださる方や、イベント参加者からのご寄付など、ご支援者の増加に結びついています。

一般寄付金や各種募金は、募金やニュースレターなどの呼びかけの成果があり、金額が20%以上増加しました。しかし、導入したばかりのマンスリーサポーター制度は、広報の取り組みが十分にできず、なかなか登録者を増やすことが出来ていません。

ラオス事務所においては、図書の委託販売先が5か所増え、合計20か所となりました。担当者の積極的な働きかけにより、本の販売冊数と金額は増加しています。また、昨年に引き続き、国際NGOから、当会出版図書のまとまった購入、図書室用の図書と運営に必要な備品をセットの依頼が継続しています。

■広報

フェイスブックやインスタグラム、ツイッターは、投稿を増やしたことで、情報発信ツールとして定着とともに、閲覧者数も増加しています。ホームページも発信は随時おこなっていますが、リニューアル作業が大幅

に遅れています。

活動を定期的に報告する「ラオスのこども通信」は以下の通り年3回、計4500部発行。通信送付後には、寄付額はもとより会員更新率も増加しています。



2. 東京事務所

■体制

以下のメンバーにより運営されました。

常勤非専従事務局長 1名
常勤専従スタッフ 2名

年間を通じて、常勤専従スタッフ2名、常勤非専従事務局長1名で運営を担当しました。また今年も会計ボランティアスタッフ2名の継続した協力により、大いに事務局が支えられました。インターンは、昨年度からの継続4名、新規4名合計8名が、事務所業務をサポートしました。多くの支えにより、総合的に事務局の業務態勢を維持することができました。

3. ラオス事務所

■体制

以下の8名により運営されました。

事務所所長	1名
常勤専従スタッフ	5名
日本人駐在員	1名
アドバイザー	1名

当会のラオス政府との活動覚書 MoU が2016年11月で切れ、更新手続が大幅に遅れたことから、各種事業の遂行に影響が出ました。新しい覚書締結に向けて準備を進めましたが、年度内に完了することはできなかったことで、課題として残りました。

また、今年度は、事業評価活動に丁寧に取り組んだことで、スタッフがプロジェクトの総合的的理解ができるようになってきました。

ラオス大学の学生のボランティアは毎年継続されており、また、恒例の日本人大学生のボランティアの受け入れもおこないました。

2017年度 第16期 会計報告 (2017年7月1日～2018年6月30日)

活動計算書

科 目	金 額
I 経常収益	
1.受取会費	975,000
2.受取寄付金	6,370,132
3.受取助成金等	23,324,890
4.事業収益	7,226,478
5.その他収益	30,105
経常収益計	37,926,605
II 経常費用	
1.事業費	
(1)人件費	10,893,407
(2)その他経費	21,560,813
事業費計	32,454,220
2.管理費	
(1)人件費	2,145,676
(2)その他経費	4,229,646
管理費計	6,375,322
経常費用計	38,829,542
税引前当期正味財産増減額	-902,937
法人税等	70,000
当期正味財産増減額	-972,937
前期繰越正味財産額	9,390,558
次期繰越正味財産額	8,417,621

貸借対照表

科 目	金 額
I 資産の部	
1.流動資産	11,763,084
資産合計	11,763,084
II 負債の部	
1.流動負債	3,345,463
負債合計	3,345,463
III 正味財産の部	
前期繰越正味財産	9,390,558
当期正味財産増減額	-972,937
正味財産合計	8,417,621
負債及び正味財産合計	11,763,084

今期は経常収益が減少し、正味財産増減額がマイナスになりました。助成金事業が上半期で終了し、新規事業を年度内に開始できなかった結果です。一方で、各種募金の働きかけの改善が定着し、寄付金が増加し、財務体質の改善を進めることができました。ラオス事務所では、読書推進活動での受託事業が継続し、図書販売の増加により、収入が増加しました。

NPO法人会計基準に沿った会計システムで会計処理をおこなっています。より詳しい資料は、当会ホームページにてご覧いただけます。

事業別損益の状況

科 目	経常収益計	経常費用計
出版事業	1,680,064	2,185,981
図書室地域展開事業	5,599,727	5,425,109
図書館建設事業	0	28,172
学校図書室整備事業	5,225,518	5,509,379
子どもセンター事業	489,049	156,859
奨学金事業	11,215,722	9,543,760
特別実施事業	4,923,184	4,249,900
交流事業 *1	1,397,209	1,248,467
収益事業 *2	4,820,944	4,106,593
事業部門計	35,351,417	32,454,220
東京管理費	2,212,381	4,542,915
ラオス管理費	362,807	1,832,407
管理部門計	2,575,188	6,375,322
合 計	37,926,605	38,829,542

*1 交流事業は、各種イベントの参加費、ラオス語絵本プロジェクト、講師派遣・訪問受入などです

*2 収益事業は、現地での図書販売も含まれます

監査報告書

特定非営利活動法人 ラオスのこども
代表 チャンタソン インタヴァン 殿

2018年9月1日

特定非営利活動法人 ラオスのこども

監事 田中 仁津司

監事 矢崎 芽生

私たちは、特定非営利活動法人ラオスのこども 第16期 2017年7月1日から2018年6月30日までの事業年度における、事業及び会計の監査を行い、次の通り報告する。

1. 監査方法の概要

- (1) 会計監査について、帳簿ならびに関係書類の閲覧など、必要と思われる監査手続きを用いて、財務諸表ならびに収支計算書の正確性を検討した。
- (2) 業務監査について、理事会に出席し、理事及び事務局から業務の報告を聴取し、関係書類の閲覧等、必要と思われる監査手続きを用いて、業務の妥当性を検討した。

2. 監査意見

- (1) 活動計算書、貸借対照表、財産目録は、会計帳簿の記載事項と一致し、法人の収支及び財産の状況を正しく示していると認める。
- (2) 業務報告書の内容は、真実であると認める。
- (3) 理事の職務執行に関する不正の行為または法令の定款に違反する重大な過失はないと認める。

以上

2018年9月1日に脇田康司監事(弁護士)、矢崎芽生監事(公認会計士)により、監査がおこなわれ、上記の通り、監査報告書を受け取りました。

2018年度 第17期 事業計画 (2018年7月1日～2019年6月30日)

□背景と方向性

今年度は、現在進行している2016年7月1日から2019年6月30日までの第7次中期計画にのっとり、「読書推進活動」、「出版プロジェクト」、「子どもセンタープロジェクト」を継続して推進するとともに、ラオス事務所の能力強化や東京事務所での資金調達力の強化に取り組んでいきます。これまで長い間、初等教育レベルを意識してきた「読書推進活動」では、中等教育レベルでの活動により取り組むこととします。加えて、村教育開発委員会と連携を確かなものすることで、地域としての読書推進の担い手を育てる方向性を強めます。

第7次中期計画の最終年度として、この3年間の活動、運営を振り返り、ラオスの子どもの中期的な展望、到達点を意識した次の中期計画を策定することになります。

いずれにしても、組織運営、事業運営において取り組んできた改善の成果は、少しずつ見えてきていますが、まだまだ取り組みが十分でない点も多く、これらをどう改善していくのかが、今年度の課題となります。

□全体方針

1. 事業の自主、持続的な活動展開を意識し、これまで積み上げてきたプロジェクト成果の継続性を重視した事業運営を継続します。
2. 資金調達力の向上を通じた財政基盤の強化に取り組みます。
3. 東京事務所とラオス事務所のコミュニケーションを改善して、両事務所が有機的に連携して、組織目標の達成に努めます。
4. 計画的な研修などにより、スタッフの能力強化を図り、組織の運営能力の向上を図ります。

今期の運営責任を持つ理事・監事は以下の9名です。

理事	・猿田 由貴江 ・チャンタソン インタヴォン ・森 透	・塩谷 光 ・野口 朝夫	・新藤 雅章 ・広瀬 未奈
監事	・矢崎 芽生	・脇田 康司	

ラオスでのプロジェクト

I. 本に出会い、親しむ（読書推進活動）

●学校図書室の整備

小中学校の空き教室を利用して、本棚や本を提供し、教員を研修し、学校図書室を設置する活動を継続します。新規開設は4ヵ所でおこないます。また、既存の学校図書室の停滞化を防ぐため、フォローアップを強化します。今年度はヴィエンチャン都及びヴィエンチャン県でこれまでに開設した図書室8ヵ所で、活動状況調査とアドバイスを実施します。

●中等学校の図書館整備事業

中等学校（中学4年高校3年一貫校）では、生徒数の増加に比し教育環境および図書室の整備が遅れています。そこで、これまでに実施した事業の経験を生かし、ヴィエンチャン県において、新たに3ヵ所の中等学校で図書館建設をおこないます。事業は3年間の計画で実施し、1年目の今年度は、ポンホーン郡のポンサイ中等学校で、図書館を整備します。その際、学校を管理する地方教育局、村教育開発委員会と連携し、持続する読書推進活動として定着することを目指します。

●読書推進イベントの実施

図書館・図書室活動の重要性と認識を広め、読書

推進活動の普及と活性化を目的としたイベント「ブックフェスティバル」等の活動をおこないます。ラオスで資金調達をおこない、県や郡の教育局と協力して実施します。

●ラオス事務所併設図書館の活動

経済成長にともない、子どもたちの生活の変化が著しく、当会の図書館を利用する子どもも徐々に減少しています。インターナンやボランティアと協力し、子どもたちにとって魅力のあるアクティビティを実施する機会を計画的におこない、満足度を高める工夫をおこないます。

II. 本をつくる（出版プロジェクト）

ラオスの子ども達にとって、どのような本の提供が意味があるのかを検討し、質が高い多様な本を計画的に出版します。

今年度は、4タイトルの図書・紙芝居を出版し、うち、少なくとも1タイトルは新刊とします。また、海外の人気の高い作品をラオスで出版できるよう準備をおこないます。

出版の企画会議を、日本からの専門家のアドバイスを得ながら実施することで、スタッフの人材育成を

おこないます。また、若手作家の発掘と育成を目的としたプログラムの実施を検討します。

III. 集い、表現し、学び合う（子どもセンター）

子どもたちの環境が変化する中で、来館者数が減少し、活動が停滞している館が増えている一方で、とりわけ地方においては、子どもたちの健全育成の場として、子どもセンター活動が必要とされています。そこで、子どもセンター活動の再建のために、スタッフのトレーニングなどを基本に、当会としてどのようなことが可能かを再度検討します。

好評の「折り紙ワークショップ」を、2か所の子どもセンターにて、職員と近隣の学校教員を対象に実施します。折り紙ワークショップ実施の際に、子どもセンターの活動状況や課題の把握に努めます。

IV. 奨学金事業（受託事業）

2012年より協力してきた高校生（中等学校5年～7年）対象の奨学金事業を継続します。奨学金受給者は、ヴィエンチャン都150名、カムアン県150名、合計300名を予定しています。事業の実施にともない、応募者との面談により、子どもたちの生活状況

を詳細に把握し、中等学校との連携が深まることから、これらを次期中期計画の策定に活かします。

日本での活動

引き続き、「開発教育・国際理解」「ラオス語絵本プロジェクト」「使い残し・書き損じハガキ収集」の活動をおこない、ラオスの子どもたちの状況や会の活動への理解を深めます。

組織の運営

市民性を大切にしながら、より専門性をもつNGOとして、安定した活動が継続するよう、東京、ラオス両事務所間での情報共有を深めます。そして、事業運営における論理性を常にチェックすることで活動の質を高め、研修などによりスタッフの能力を高め、組織の運営能力の向上を引き続き図っていきます。

また、広報活動を強化し、寄付者を増やすために、ファンドレイジングの手法により資金調達をすすめます。

第7次中期計画の振り返りをおこない、第8次中期計画を策定します。

2018年度 第17期 予算 (2018年7月1日～2019年6月30日)

科 目	金 額
I 収入の部	
1.受取会費	960, 000
2.受取寄付金	5, 300, 000
3.受取助成金等	29, 400, 000
4.事業収益	6, 800, 000
5.その他収益	150, 000
収入合計	42, 610, 000
II 支出の部	
図書館建設事業	15, 900, 000
学校図書室整備事業	3, 700, 000
読書推進関連事業	250, 000
出版事業	1, 620, 000
子どもセンター事業	720, 000
奨学金事業	9, 000, 000
交流事業・収益事業	3, 300, 000
東京管理費	4, 870, 000
ラオス管理費	1, 840, 000
支出合計	41, 200, 000
前期繰越金	3, 168, 872
次期繰越金	4, 578, 872

繰越金には前受助成金を含みます

これまでの寄付金及び事業補助金を維持しながら、「ファンドレイジング」に基づき、定期的な特別募金（夏＆冬）やカレンダー販売を継続して実施します。さらに、新たな支援者獲得を目指すマンスリーサポーター制度の強化のために、各種イベントや広報ツールを通じて積極的に広報します。また、ラオスの織物や料理などの販売を継続し、使い残し・書き損じハガキ、未使用切手収集キャンペーンを強化します。

ラオス側での資金調達を更に促進し、図書の販売については、実績データ整理し、販売戦略をたて、図書委託販売先及び販売可能な図書の出版を増やします。さらに、企業、外国政府、国際機関、国際協力NGOに対し資金調達を意識したプロジェクトを働きかけます。





特定非営利活動法人ラオスのこどもは、
今なお十分な教育を受ける機会がないラオスの子どもたち
の成長を願い、1982年から日本とラオスを中心に活動
を続けている国際協力NGOです。あとも、「図書・紙芝居の出版」「学校・地域での図書室設立」「先生向けの図書室運営・図書活用の研修」「作家・編集者の育成」、子
どもが集い遊び学べる「子どもセンター」の運営支援など
を行い、子どもが自ら学ぶ力を伸ばす環境づくりに取り組
んでいます。

組織の理念

「ラオスのこども」は、公正で平和な社会づくりに貢献する
ことを目的として、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を
主体的に選択できるよう、日本とラオスの人々が協働しなが
ら、読書に親しみ環境をつくります。

(認定) 特定非営利活動法人**ラオスのこども**

〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12, 303
TEL/FAX 03-3755-1603 E-mail alctk@deknoylao.net
<http://deknoylao.net>